

(論文内容の要旨)

本稿は、スーフィー（イスラーム神秘主義者）による、秘匿された知識の伝達を考察の対象とする。ただし、本稿で扱うのは、秘匿された知識の内容そのものではなく、知識の伝達を行う師弟間の関係の規定性や、個々の師弟間の連鎖による知識の伝達の道筋を示す系譜の構造の変化といった、「形」の部分である。考察の主な対象は、14世紀の南アジアで活動したスーフィー、Jalāl al-Dīn Ḥusayn Bu ārī の事例である。なお、本稿では、神秘体験や秘匿された知識を得ることを目的として実践されるスーフィズムでの師弟関係の連鎖と、我が国における「(知識や技芸、役職などを) 代々伝え受け継ぐこと」という相伝の構造が類似することに着目し、スーフィズムでの師弟関係の連鎖の総体を「相伝」と呼んでいる。相伝を視覚化・図式化すると、系譜になる。スーフィズムの系譜は、理念上は全てイスラームの預言者 Muḥammad から発する。また、特に有力な教えを編み出したスーフィーから発する幾筋かの系譜は、総体として、その教えの創始者の名前などにちなんだ名を冠されることがある。本稿では、このように名祖を共有する系譜の総体を系統、Muḥammad ないし系統の創始者から個々のスーフィーに至る一筋の系譜を道統と呼ぶ。

南アジアのスーフィズム史において、14世紀後半は、知識の伝達形式の大きな転換期である。14世紀前半までの南アジアでは、1人のスーフィーは1つの「タリーカ (order、派)」にのみ属するのが普通であったが、14世紀後半から、1人のスーフィーが、チシュティー派とスフラワルディー派という2つの「タリーカ」へ加入する、いわゆる multi (multiple) affiliation が始まったのである。この変化には、個々の師弟関係のあり方の変化が関わっている。また、南アジアにおいては、multi-affiliation が一般的になった結果、スーフィズムにおける相伝の様相は14世紀までとは全く異なったものになり、それに伴って、相伝の道筋を示す系譜の形式やその意義が大きく変化した。南アジアにおける multi-affiliation は、スフラワル

ディー派の Jalāl al-Dīn Ḥusayn がチシュティー派の加入儀礼を受けることによって始まったと指摘したのは Rizvi の研究 (A History of Sufism in India vol. 1. Munshiram Manoharlal, 1983) だが、彼は、この文脈における「派」order がどのようなものを必ずしも明確にしていない。そもそもこの時代の史料において、タリーカという語は、特定の始祖に発する教えと、その教えを実践する人間集団の両方に用いられている。人間集団としての「タリーカ」を、組織化の度合いの高い教団と捕らえる Trimmingham の見解は、近年は多くのスーフィズム研究者から批判されている。本稿第2章と第3章では、multi-affiliation という現象を分析するにあたり、「タリーカ」の人間集団としての側面はとりあえず脇に置き、教えとしての側面と、その伝達経路である系譜に注目している。実のところ、1人のスーフィーが複数のシャイフから教えを受ける現象は、イスラーム圏においては、スーフィズムの古典期から広く見られ、南アジア独自のものではない。しかし、南アジアの例は、当該地域で multi-affiliation が始まったおおよそその時代と、きっかけとなった人物が特定されているという点で特殊である。これらの条件から、南アジアの multi-affiliation の例は、スーフィズムにおける知識の伝達形式の変遷を分析する対象として適しているにも関わらず、従来の南アジアのスーフィズム研究ではこの現象は特に詳しく検討されてこなかった。そこで、本稿第1章では、Jalāl al-Dīn Ḥusayn の活動を分析するための基礎とするため、彼が活動した前後の時代のスーフィズムの師弟関係の諸状況を整理する。そして第2章では、Jalāl al-Dīn Ḥusayn の multi-affiliation が、実際の師弟関係のレベルではどのように行われていたのかを具体的に描写するとともに、それが、14世紀後半の南アジア、特にデリー周辺で拡大した要因を分析し、続く第3章では、Jalāl al-Dīn Ḥusayn の子孫や弟子達が、彼から伝わる系譜をどのように理解したかを整理する。これらの議論の材料としては、英文での簡単な紹介しか行われていない Jalāl al-Dīn Ḥusayn 自身の語録や、未出版の写本から収集した情報を用いており、本研究の史料紹介としての価値は大きいと考える。

本稿第1章では、Jalāl al-Dīn Ḥusayn より半世紀ほど前にデリーで活動した Ni ām

al-Dīn Awliyā の語録に主に基づいて、当時の師弟関係のあり方を整理する。この語録はデリー・サルタナト下で著された最初期のスーフィズムの教導書として幅広く流布してきており、南アジアでは一種の規範であった。従って、概論に用いる材料として適していると考えられる。Ni ām al-Dīn Awliyā は、バイア（契約）儀礼を伴う厳格に一对一の師弟関係と、バイアを伴わず複数のシャイフ（師）と結びうる師弟関係を認めていた。当時の師弟関係には2つの形式があったと言えるが、Ni ām al-Dīn Awliyā は実践のレベルでは、ほとんどの弟子と厳格に一对一の師弟関係を結んでいた。また、師弟関係は指導の有無やシャイフが保有する神の恩寵（バラカ）などの伝達の有無でも区別され、それぞれの師弟関係は、バイアと指導を伴いバラカが伝達される「イラーダ」、バイアを伴わず指導のみを行う「交際」などと呼ばれた。この師弟関係の差異に基づき、師が弟子に与えるヒルカ（衣）の種類が変えられていた。また、師弟間におけるバラカの伝達は一对一で行われる傾向が強く、師のバラカを継承し、次の世代へと伝えられる弟子は1人だけと考えられていた。この継承は師の杖や絨毯、サンダルなど、特別な物品の伝授を介して行われた。ところで、従来の南アジアのスーフィズム史研究では、ほとんどの場合 Trimingham の古典的な研究、*The Sufi Orders in Islam* (Oxford University Press, 1971) に基づいて系統の問題が解説されてきた。しかし、Trimingham の議論は様々な時代地域の例に依拠しており、その全てが前近代の南アジアに当てはまるのかという点については大いに検討の余地がある。南アジアで書かれた史料を専ら用いてスーフィズムにおける師弟関係を詳細に検討する本章は、先に指摘した南アジアのスーフィズム史研究の不備を補うものである。この部分はまた、スーフィズムの組織についての研究がより進んでいる中央アジアやエジプトなどとの比較や、南アジア内における、イスラーム以外の宗教伝統における師弟関係の様相との比較研究の基礎ともなると考えられる。

Jalāl al-Dīn Ḥusayn の活動を分析する第2章では、彼が実践していた multi-affiliation において、彼は20人のシャイフから受けた教えをそれぞれ別個のものと認識し、弟子にはそれぞれのシャイフの教えを個別に伝えていたことを指摘

する。彼は、最初に弟子入りした父親からサイイドのヒルカとスフラワルディーヤのヒルカを受け取ったため、自らの系統をサイイドでありスフラワルディーヤだと認識していたが、複数の系統に属する20の教え全てのシャイフとして振る舞っていたと言える。また、Jalāl al-Dīn Ḥusayn の時代に multi-affiliation が拡大したのは、彼が活動していた時代のデリーにおいて、師弟間のバラカの伝達のあり方が変化し、厳格に一对一の師弟関係と、複数のシャイフと結びうる師弟関係が実践レベルで併存する環境が整っていたからだと考えられる。

一方、第3章で検討する Jalāl al-Dīn Ḥusayn の子孫や弟子が残した系譜の記録によると、子孫や弟子は彼から伝わる系譜がどの系統のものかということにより強く意識しており、同時に Jalāl al-Dīn Ḥusayn から自分たちに伝わる系譜を、自分たちが置かれた状況に合わせて様々に解釈している。つまり、Jalāl al-Dīn Ḥusayn は一筋一筋の道統を個別に認識していたのに対し、Jalāl al-Dīn Ḥusayn の子孫や弟子はそれらの道統がどの系統に属しているかを重視していた。以上のように、1人のスーフィーが受け、弟子に伝えた教えの系譜や、それに対する認識の変遷に注目したスーフィズム史の記述は、チシュティー派やスフラワルディー派などのタリーカ毎にスーフィーの活動を紹介するという、従来の南アジアのスーフィズム史の記述とは全く異なったアプローチであり、スーフィズム全体の理解にも新たな視点を付け加えるものである。

スーフィズムにおいて、教えを代々受け継ぐ相伝という行為は、基本的には、個々の師弟関係に関与した人々の間で完結する。しかし、相伝が系譜の形で記録されて当事者以外の人々の前に示される時、それはより広い文脈の中に位置づけられることになる。本稿で扱う Jalāl al-Dīn Ḥusayn の相伝とその系譜の場合、「当事者以外の人々」とは、南アジアに暮らすムスリム、及び、自らは相伝に関与する訳ではないがスーフィーを信じる人々であり、「より広い文脈」の1つは南アジアにおけるイスラーム信仰である。本稿で試みる、南アジアにおけるスーフィズムの系譜の変遷や機能、人々が系譜に与えた意義の解明は、南アジアのイスラームにおけるスーフィズムの役割や、南アジアのイスラーム信仰のあり方という、より大きな問題を

理解するための一助となると考えられる。

氏 名	にの みや あや こ 二 宮 文 子
-----	-----------------------

(論文審査の結果の要旨)

スーフィズムにおけるタリーカという用語には、(1)「真理」すなわち神への接近を目指す「道」、(2) その「道」を旅するための秘教的修行法、(3) その修行法に従う者たちによって組織される集団という連続した三重の意味のレベルが含まれている。組織としてのタリーカの中軸は、師匠(ムルシドもしくはシャイフ)と弟子(ムリード)の関係であり、預言者に淵源するタリーカ＝道は、この関係を通じて一代また一代と相伝される。本論文は、(1)と(2)のレベルのタリーカ、すなわち相伝される秘教的知の内容について問うことをひとまず禁欲したうえで、師弟関係の連鎖、すなわち道統についての観念とそれに基づいて伝授が実践された形態の変遷を13～15世紀の南アジアのスーフィズムの内に探ることによって、この地域の特殊性を明らかにするとともに、今日まで自明のこととされてきた(3)のレベルのタリーカを「教団」の語をもって理解することの妥当性を問い直そうとするものである。その際論者は、一人のスーフィーが複数の道統の伝授を受ける現象(multi-affiliation)の南アジアにおける出現とその後の展開を跡づけることを研究の主軸に設定する。第一章では、13世紀のデリーで活動したチシュティーヤ「教団」の聖者ニザームッディーン・アウリヤーの言行録の記述に依拠して、当時師弟関係には五つの類型が認められていたこと、従来一般に入門に際してのヒルカ(スーフィーが着用する外衣)の授与は、弟子が師匠に対して服従儀礼(バイア)を行ったことの証と解されてきたが、バイア抜き授与もあり得たこと、但しその場合の授与には師匠が保有する神の恩寵(バラカ)の継受は伴わないとみなされたこと、一人のスーフィーが行うバイアは生涯でただ一度のみ有効であると観念されていたこと、タリーカへの帰属は個人の選択ではなく、むしろ個人の属する地縁と血縁によって定まっていたことが明らかにされた。第二章では、次の世紀に起こった顕著な変化が扱われる。元来スフラワルディーヤに属したジャラルッディーン・フサイン・ブハーリーはニザームッディーン・アウリヤーを含む20人のシャイフか

ら道統を受けたと称し、個々の弟子にはその地縁・血縁や器量を勘案して、20の道統の内の一つを伝授した。西アジア・中央アジアでは、複数の道統の授受の例はより早くから存在するが、南アジアではジャラルッディーン・フサインをもって嚆矢とし、以後伝授を受けたシャイフの数を誇る風潮が定着する。この変化の原因を、モンゴル帝国期の政治的安定を背景として南アジアとその他のイスラーム地域との交渉がこの時代に活性化したことに求める論者の見解は首肯すべきである。第三章は、ジャラルッディーン・フサインの子孫と直接間接の弟子たちの道統継受についての見解を紹介・分析する。子孫たちは先祖の20の道統を整理統合する一方で、この先祖を通じてスフラワルディーヤとチシュティーヤのみならず当時知られる限りの「教団」の道統に自分たちが連なっているとの主張を展開した。そのうちには、イーサー・ビン・マリヤム（すなわちイエス）を始祖とするイーサウィーヤまでもが含まれている。論者によって発掘されたかかる実態は、道統がタリーカ＝教団の持続的存在を担保したとの従来の定説が少なくとも南アジアには適応不可能なことを明確に示している。

本論文は、南アジアで著述された数多くのペルシア語スーフィズム文献を博搜して成ったものである。現代のインドにおいて、これらの文献に対する関心はイスラームの間にあってさえ極めて希薄であり、多くの写本は劣悪な保存環境のもとで物理的な消滅の危機にある。従って、論者が現地においてこれらの文献の調査研究に取り組んだことそれ自体がまず評価されるべきである。論者によって紹介された幾多の興味深い事例は、他地域との比較研究の材料となるばかりでなく、従来のタリーカ理解の再検討を迫るものである。歴史学の立場からスーフィズムを扱う際には必須であるタリーカの社会性やその政治権力との関係についての論述が希薄であることは、本論文の看過し得ぬ問題点ではあるが、論者が既に手中にしている史料群の更なる分析によって、今後研究をこの方面に展開することが期待される。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年10月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。